

決算委員会 専門員
桐山 正敏

事務局職員にパソコンが供与され、インターネットに接続できるようになったのは 98 年のこと、僅か 10 年前である。今や仕事だけでなく日常生活でも、HP からの接続しか認めない応募も多くなった。ネット検索ができず、メールアドレスを持たない人間は、社会の動きから取り残され、江戸時代で言えば「読み書きそろばん」のできないような存在になってしまった。無尽蔵に提供される選別されない雑多な情報の洪水の中で溺れそうな毎日が続いている。時代の流行は目まぐるしく変わり、75 日も持たないケースも多い。

そんな時代を生き抜く指針になるかと、梅田望夫「ウェブ時代をゆく」(2007 年 11 月 筑摩新書) を手にしてみた。彼は、自らの内部にカサンドラ(ギリシア神話に登場する、予言能力を持ち、危機を組織に訴えたが、受け入れられず殺された女性) を持てと言う。そして「①「世の中と比べ、おそろしくゆったりと時間が流れている」組織、②「毎日同じことの繰り返しで変化があまりない」仕事、③「新しいことを何もしない」ことが評価される社風、④「小さなことでも個に判断させず、判断の責任を集団に分散させる」傾向のある会社、⑤幹部の顔ぶれを眺めたとき、「その会社のプロ」ばかりが重用されている会社」になっていないかと問いかけている(p195-196)。果たして自分はカサンドラ足りうるか、このような問題意識を失ってしまっているのではないかと考え込まされた。

近年、世間では、他人の仕事をとやかく批判する「評論家」ばかりが増えてしまった。役所の組織も管理・監督する部門ばかり肥大化し、現場の仕事をするヒトが少なくなり、かつ軽んじられているように思う。不祥事が起きると調査チームが作られ、報告書がまとめられ、新しい通達が出され、総点検の結果、より厳しい新しい基準の導入が行われるという「かくあるべき」論が押し通っている。

だが、その前提として、果たして、それが、現状の組織で対応できる業務なのか否かの検討、検証がなされているだろうか? 建築偽装後の建築基準法の杓子定規な適用により現場では混乱が起これ建設需要は大きく落ち込んだ。また随意契約の縮小という建前論は正しいとしても、市町村に同じ基準で実施を求めるのは「小学生に微積分を解け」と言うに等しいところがある。また医療と介護との峻別という正論の下で、老人保健施設にいる老人が病院に行くときは、介護補助は適用されず、入院すると医療保険の対象で介護からは外れて右往左往、杓子定規な運用が多くの人とその家族を苦しめている。世の中の実態を踏まえた改善がなされておらず、地道な努力をしているヒトが報われない方向に社会が向かっているのではとの懸念に耐えない。当室の職務も「評論家」にならぬよう心したい。

ところで「衆参のねじれ」が生じて一年が経った。細かいところでは日々新たな事例が生まれている。既存のやり方を徹底的に見直していく必要が出てきている。帝国議会初期、行政権と立法権の緊張関係は極めて強く、随分と大胆な予算案修正が行われ、法案も議員立法の方が政府提案の法律より多かったという。明治から 60 年で昭和となり、戦後は既に 60 年を超えた。我れ知らぬ間に「時代の大きな変わり目」を迎えているようだ。